

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520679

研究課題名（和文） 近代日本の景勝地の鳥瞰図に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文） Historical-geographical study on the pictorial maps of the major scenic spots in modern Japan

研究代表者

中西 僚太郎（NAKANISHI RYOTARO）

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：70202215

研究成果の概要（和文）：明治期から昭和初期に作成された、厳島、和歌浦、天橋立、富士山、耶馬溪などの景勝地の鳥瞰図について、その現存状況を調査し、データベースを作成するとともに、作成主体、作成目的などの資料的検討を行った。それをふまえて、同地域の「案内記」や「写真帳」などの関連資料や、近世の絵画資料を参考にして、鳥瞰図に描かれた内容を分析し、表現された景観の特質を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I made the database on the pictorial maps of the major scenic spots such as Itsukushima, Wakanoura, Amanohashidate, Mt. Fuji, Yabakei, which were created from the Meiji era to the beginning of Showa era. I also examined who made the maps or for what reason. After this, I clarified the characteristics of the landscapes expressed in the maps by reference to the Guide books of the same age or the pictures in the Edo era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総 計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：鳥瞰図、景勝地、写真、近代日本、厳島

## 1. 研究開始当初の背景

現代の日本では、世界遺産ブームにみるように、歴史的な文化財や景観に対する関心が、非常に高まっている。このようななかで、日本三景に代表される景勝地に関して、その景観の特質を検討することは、景観保全の観点から、観光地としての価値を再認識するためにも重要な意味をもつ。景観とは客観的に存在する自然・人文現象ではなく、人々によって意味づけられた地表面の姿である。そのため、歴史的に作られてきたものといえ、そ

の特質の解明は歴史地理学的に行われる必要がある。

研究代表者は、従来から明治期から昭和初期の近代に作成された都市や景勝地、社寺の鳥瞰図に関心を持ち研究を進めてきた。とくに、明治期から大正期にかけては、銅版もしくは石版印刷による対象を精緻に描写した鳥瞰図が数多く作成された。それらは描写が精緻であるため、当時の景観研究には格好の資料となるものである。

景勝地に関して、松島の鳥瞰図とそれに表

現された景観の特質に関しては、平成 15～18 年度に共同研究による科学研究費補助金が得られ、一応の成果をまとめることができた。しかし、他の景勝地に関しては、一定の資料的検討を行ったにとどまり、景観の特質の検討までには到らなかった。そこで、松島に関して行った研究をいっそう発展させるために本研究を構想した。

なお、従来、近代日本の景勝地の鳥瞰図に関する学術的研究は、研究代表者の松島の研究以外は、ほとんどみられない。

## 2. 研究の目的

本研究は、近代日本における厳島、和歌浦、天橋立、富士山、耶馬溪などの景勝地の鳥瞰図を悉皆調査し、作成主体や作成目的などの資料的検討を行うとともに、同時期に作成された「案内記」や「写真帖」や近世の絵画資料を参考にして、鳥瞰図に表現された景観の特質を明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

日本における近代の時期は、さまざまに設定可能であるが、本研究では明治初期から第二次世界大戦前の昭和初期までとする。検討対象とする景勝地は、主に厳島、和歌浦、天橋立、富士山、耶馬溪であり、その他に必要なに応じて他の景勝地も取り上げる。これらの地域を取り上げる理由は、日本の代表的な景勝地であるとともに、従来の予備的な調査から、鳥瞰図が比較的多く存在すると予想されるためである。

なお、近代日本の鳥瞰図のなかでも、大正期以降に盛んに作成された吉田初三郎とその門下による鳥瞰図は、近世の木版画や明治初期の銅版画の流れを汲む近代の鳥瞰図（後述の「真景図」）とは、描かれる地域スケールや意匠が異なるため、本研究では研究対象外とする。

研究方法としては、まず、これらの景勝地に関して、近代の鳥瞰図を悉皆調査し、データベースを作成する。それをもとに、作成主体や作成目的などの資料的検討を行う。また、景勝地の観光案内の役割をもっていた「案内記」や「写真帖」についても、参考資料とするため、合わせて資料調査と資料的検討を行う。続いて、鳥瞰図に描かれた内容を、「案内記」や「写真帖」、近世の絵画資料を参考としながら分析し、表現された景観の特質を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) 本研究では、まず、厳島、和歌浦、天橋立、富士山、耶馬溪について、鳥瞰図及び「案内記」「写真帖」を、各種図書館や資料館（東京周辺および現地）、古書店等にて資

料調査し、内容の確認と現物や画像・コピーの収集を行った。その結果、現存する大部分の鳥瞰図、「案内記」「写真帖」の内容を把握することができ、主要なものについては現物や画像を入手することができた。そして、鳥瞰図については、データベースを作成するとともに、作成主体、作成目的などの資料的検討を行った。なお、松島に関しても資料収集を継続して行い、データベースの充実を図り、資料検討も再度行った。

また、研究を進めるなかで、吉野山と高野山の鳥瞰図も比較の対象として重要であると認識し、その資料調査・収集やデータベースの作成、資料的検討を行った。

資料調査の結果得られた鳥瞰図のデータとしては、厳島が最も多く約 70 点に及び、松島が約 50 点、富士山が約 30 点、高野山が 16 点、吉野山が 8 点、和歌浦、天橋立、耶馬溪が各々 3～4 点であった。

(2) 松島の事例も含めた各地の鳥瞰図の資料的検討の結果、全体的傾向として指摘できるのは、明治 10 年代から作成が始まり、明治 20～30 年代に盛んに作成されたこと。作成主体は主に地元の物産店や寺社であり（印刷は東京や大阪、京都などの業者が担うことがあった）、鉄道や汽船の発達にともなう、近代のツーリズムの展開と呼応する形で、観光地案内、土産品として作成されたことである。そして、明治 40 年代以降大正期にかけて作成が低調となっていくのは、「写真帖」や写真が掲載された「案内記」、写真の絵葉書が作成されるようになり、観光地の景観を写実的に伝えるメディアとしての役割はそれらに代替されていったためと考えられる。なお、鳥瞰図や「案内記」、「写真帖」の作成状況に関しては、代表例として厳島の事例を表 1 に示した。

また、これらの鳥瞰図は「真景図」と称されることが多いため、「真景図」と総称することが可能である。ただし、これは近世の南面における、作者の心意が込められた「真景図」とは異なり、対象を写実的に表現した図という意味での「真景図」と解釈できる。

(3) 鳥瞰図に描かれた景観の特質については厳島に関して詳しく検討した。その結果は次のようにまとめられる（図 1、図 2 参照）

明治期から昭和初期における厳島の鳥瞰図の主題は厳島神社であり、その点は近世から明治初期に作成された木版の鳥瞰図を踏襲したものであった。ただし、構図としては、厳島神社を画面上に必ず順勝手に描き、近世の図とは異なり逆勝手に描くことはないという特徴が認められる。

表現内容で注目されるのは寺院がほとんど描かれていないことである。これは、近世

表 1 発行年次別にみた厳島の鳥瞰図・案内記・写真帖の作成状況

発行年次	鳥瞰図	案内記・写真帖
1870 明治3	△	
1871 明治4	△	
1874 明治7	△	
1875 明治8	△	
1878 明治11	○	○
1880 明治13	○	
1882 明治15		○
1883 明治16	○	
1884 明治17		○
1888 明治21	○	
1892 明治25	○○	
1893 明治26	○○○	○
1894 明治27	○○○○	○
1895 明治28	○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○	●○○
1896 明治29		○
1897 明治30	○○○○	○
1898 明治31	○○	
1899 明治32	○○	
1900 明治33	○○	
1901 明治34	○○○○○○○○	◎
1902 明治35		◎
1903 明治36		◎
1904 明治37	○○○○	●●◎
1905 明治38	○○○	●●◎●
1906 明治39	○	
1907 明治40	○	
1908 明治41		▲
1909 明治42	○○	◎●◎
1910 明治43	○	●
1911 明治44	○○	●
1912 明治45		●◎
1913 大正2	○	◎
1915 大正4	○	
1918 大正7	○○○	●
1919 大正8		●
1920 大正9		●
1921 大正10		●
1922 大正11		●
1923 大正12	○	
1924 大正13	○	
1925 大正14	○○	
1928 昭和3	○	
1936 昭和11	○	
1938 昭和13	○	

(注) ○印が各資料 1 点を表し、△は木版の鳥瞰図、●は写真帖、◎は写真入りの案内記、▲は冊子体の絵葉書を示す。

の鳥瞰図では寺院がしっかりと描かれていることと対照的である。その理由としては、厳島では神仏分離と廃仏毀釈が徹底して行われ、明治初期には寺院の衰退が著しかったことと同時に、国家神道の影響が強い空間として表現しようとする意識があったためと

考えられる。廃仏毀釈の風潮は、明治 20 年代以降は下火となるが、その後に作成された厳島の鳥瞰図においても、寺院の描写が排除される傾向は続いた。その理由は、厳島の鳥瞰図では構図はもとより、描写内容についてもかつての図を踏襲する傾向が強く、明治 10 年代までに作成された図がその後の図のモデルとなり、描写内容において強い影響を与えたためである。寺院が再び描かれるようになるのは、大正後期に新しい意匠の図が作成されるようになってからである。

表現内容においてさらに注目されるのは桜の強調である。厳島の鳥瞰図では、明治 10 年代の図において既に厳島神社の周辺にはかなりの桜が描かれている。それが正確な事実であるか否かは断定できないが、ナショナルな表象としての桜があふれる空間として厳島を表現しようとしていたことは確かである。そして、厳島の鳥瞰図は明治 20 年代末より多色刷りが基本となるが、多色図において色彩的に強調されていたのは、厳島神社の朱塗りの社殿とともにピンク色に花咲く桜であった。その一方で、紅葉の名所としての描写は限定的で控えめにしかみられない。厳島の鳥瞰図において紅葉が強調された描写がみられるようになるのは、寺院の描写の場合と同じく大正後期の新しい意匠の図からである。



図 1 大日本安芸国厳島神社之全景(明治 13 年)  
(研究代表者所蔵)



図 2 日本三景之一厳島神社真景全図(明治 37 年)  
(研究代表者所蔵)

(4) 巖島以外の鳥瞰図に関して、鳥瞰図の性格や描かれた景観の特色としては次のことが指摘できる。

富士山の鳥瞰図は山の景観そのものを主題として描いたものはほとんどなく、大部分が「登山案内図」として、麓の登山集落や神社、登山経路を主題として描いたものである。

高野山と吉野山の鳥瞰図を比較すると、高野山の図は単色刷りのものがみられるのに対して、吉野山の図はほとんどが多色刷りであり、それは巖島の場合と同様に、桜を強調して表現するためであったと考えられる。

和歌浦と天橋立に関しては、ともに砂嘴の景観に特徴がある海浜の景勝地であるが、和歌浦の鳥瞰図は陸地から海の方を眺める構図が基本であるのに対して、天橋立は同様の構図もみられるが、海から陸地の方を眺める構図が多い。これは近代以前の屏風絵などにみられる絵画や絵図の表現が影響したと考えられる。

以上の研究成果は、荘園図や国絵図、名所図の研究など、従来数多くなされてきた日本の絵図・地図の研究史上、独自の成果と位置づけられる。そして、景勝地の景観研究において新たな研究手法を提示したものといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①中西僚太郎、明治・大正期の巖島を描いた鳥瞰図、歴史人類(筑波大学)、査読有、38、2010、58～82 ページ。

〔学会発表〕(計2件)

①中西僚太郎、近代日本の景勝地の鳥瞰図に関する歴史地理学的考察、人文地理学会大会(特別研究発表)、2009年11月7日、名古屋大学。

②中西僚太郎、明治・大正期の鳥瞰図に描かれた松島、地理空間学会例会、2008年5月10日、筑波大学東京キャンパス。

〔図書〕(計1件)

①中西僚太郎・関戸明子編著『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』、ナカニシヤ出版、2008年、196 ページ。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中西 僚太郎 (NAKANISHI RYOTARO)